

# PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

## 胎児からの SOS

博愛園長 武田 紀



私は「沈黙からの叫び」と初めて出会ったのは、「高知ボランティアビューロー便り」の五月号の中の一頁で、

児童福祉の月でした。その時は、私は胎児のあの何とも言えないかわいママへのあつたかな愛の訴えに目を見張る思いで、次々と行を追いながら、私も喜びにみたされ、胸を躍らせて、息もつかず一気に読んでいたのですが、突然おもいがけない最後に至った時の衝撃、心の痛みを今でも忘れることが出来ません。

七月のある日私達は高知大学のノボトニー先生の講演会に行きました。そして初めてビデオを通して、この沈黙の中からの叫びをこの目で見、この耳で聴くことが出来ました。この時のショックは、前にも増して全身を貫き、暫く言葉がありませんでした。こんな残酷、こんなひどい事が世にあるのでしょうか！私も沈黙の中から叫びました。中絶あってはなりません。

八月に入って高校生のワーク・キャンプが博愛園でありました。五人の若者の求めで、百余年前に創立した「社会福祉法人高知慈善協会」の沿革史を話しました。藩政時代から続いた墮胎、圧殺、間引きという言葉そのものが、現代には耳にすることが無く、若者には理解が出来ませんでした。私は仕事柄、いつもこの創立の理念に思いを致す時、一世以前私達の先人は、人間の旗印にパイオニアとして多くの実績を残してきたのにもかかわらず、現在に至っては児童福祉法がありながら、言葉こそ人工妊娠中絶と変わっても合法的に胎児の抹殺が認められているという事は、一体どういうことでしょうか？

私は更に、闇から闇に葬られる墮胎(私はあえてこの昔の言葉を使います)の現実を黙っていることが出来ませんでした。私は博愛園に来る前、少しの問刑務所に勤めていた時があります。その当時まで姦通罪、墮胎罪がありました。今はありません。然し、無くなったから赦されているとは言えることではありません。胎児を殺すことに変りはありませんから。

そこで私は話しがそれでしたが、経営主体の百余年の伝統の中で、会に至って更にその理念を声を大にして訴えていることを話すと共に、合回のワーク・キャンプにこの沈黙の中からの叫びをとりあげました。若者にとって初めて、私にとっては二回目でありましたが、回を重ねるにつけ私達の衝撃は深くなってくるばかりです。

この間、韓国人の知人と土佐の国の昔の墮胎、圧殺を話しあった時、彼は両耳を塞ぎ、涙しながら私に話をやめてくれ、と言うのです。余りにもショック過ぎたかと思つた私に、「それは土佐だけの事ではない私達の韓国にも同じようにあった事で、私には耐えられないこと。非人道です。昔も今も変わらない。それは赦されぬこと。」と彼は慟哭しました。

第三世界は、飢餓の為に、飽食の私達の世界では、墮胎の為に葬られる兄弟姉妹のどんなに多くあることか、私達はいつもこの事実を忘れてはなりません。神から受けた神秘的な命、尊厳な命、この命との出会い分かち合い、生きることこそ私共、今を生きる者の使命ではないでしょうか。

# 沈黙の叫び



超音波による胎児の観察。麻酔を可るB.N. ネイザンソン博士

**THE SILENT SCREAM**  
サイレント・スクリーム

「ごらんください。  
私たちは争いも消されようとしている

胎児からのS・O・S・人工妊娠中絶に対する賛否は今や世界中で最も激しい論争の一つとなっています。今回、超音波診断装置を用いて、中絶される胎児の胎内での反応を映像にとらえ、「沈黙の叫び」として公表されたことから、論争は更に加熱

しています。

大要

B・N・ネイザンソン博士は妊娠4週目、6週目、12週目、16週目、18週目、20週目、そして28週目と実物の大の胎児の模型を示し、これらの胎児の間には、どの時期から人間と呼べるかを示すような変化はないと指

摘する。つづいてこれから中絶されようとしている12週目の胎児もすでに完全に形造られた1人の立派な人間であることを訴える。

やがて中絶手術が始まり、挿入されて来た器具に対する胎児の反応が映し出される。吸引チューブが胎児の体の位置を探るとき、胎児は必死で子宮の中を逃げ回る。このとき胎児が口を大きく開けていることがわかり、ネイザンソン博士は死の恐怖を感じた胎児の「声なき叫び」であると説明する。胎児の心臓は早鐘の如く激しく拍動しているのが見られ、1分間200回を記録する。

羊膜に穴が開けられ羊水が吸い取られてしまうと胎児は吸引チューブにとらえられ、その吸引力で、小さな足、腕、胸がひきちぎられ吸い取られていく。最後に残った頭部は子宮鉗子でつかまれ粉々の断

片に砕かれ子宮から取り除かれる。

これは殺人でなくて何と言うべきか。胎児は人間ではなく物にすぎないと言ふことによつて人々はこれを殺人ではないと主張する。中絶する女性の権利は声高く主張されるが殺される胎児は自分の生きる権利を主張するすべからず持たない。無神論ヒューマニズムの立場に立つネイザンソン博士は、人類が自分の血を分けた小さく弱いいのちを、自らの手で奪う者となつてしまったことを深く憂える。



指を吸う16週目の胎児。小さくとも完全な人間



12週目の胎児のX線写真。骨格も完成されている



二年前、私は全世界に支部を持つプロ・ライフ・ブームメント(中絶に反対する運動)の会員となりました。いろいろな機会を通して研鑽をつんできました。

活動を展開するうちに、現代社会にとって大きな問題であると結論したのです。医学、そして社会学との関連の中だけではなく、人間の命の尊厳を深めてゆこうと思つたのです。優生保護統計報告によれば、毎年日本の少女たちが二万八千三十八人中絶手術を体験しているといわれています。しかし、高知市内に勤務する医療従事

者の話では十五万人といわれるのです。中絶は単なる医学的処置ではなく、多くの領域との問題の初めでもあるのです。

十年間にこのような中絶は続けられているのです。昭和六十年度中に全国の医師よりの届出による人工妊娠中絶件数五十五万百二十七件でしたが、さきの医療従事者の話によると二百二十万五千八百八件から二百七十万六千五百五十三件までの小さな命が抹殺されているというのです。これを聞いた時、私にとつて大きなショックでした。

最近ある地方新聞に執筆を依頼され、次の内容を掲載致しました。日本は今、世界一の長寿国となつています。しかし、出生率は一番低いのです。日本の将来は老人社会でしょう。小さな命を抹殺し、その上に繁栄の社会を築き上げるのでしょうか。

プロライフ・ムーブメント

トに関するパンフレットを同封致しております。御一読下さい。又、ご意見などお聞かせいただければ幸いです。

日本プロ・ライフ・

ムーブメント

(中絶に反対する運動)

代表者

ノボトニー・ジェリー

OMI

あなたも声なき胎児の声になって下さいませんか？

中絶に反対する運動：

1. 「沈黙の叫び」を見ること。

2. 友達に「沈黙の叫び」を見せること。

3. 「沈黙の叫び」について話すこと。

4. グループをつくって事実を調べること。

5. 新聞と雑誌に記事を書くこと。

## ショック

私は先日ワーク・キャンプにおいて博愛園で「沈黙の叫び」というビデオを見せていただいた高の高校生です。中絶のシーンとかショックでした。家庭科の授業などでもわりと時間をかけて勉強しましたし、保健の授業でも生命誕生などの私にすればすごくびっくりしてリアルな感じのビデオも見ました。学年集会などでも病院の先生の講義を聞いたりではんの少しの知識？もありましたが中絶については何度聞いても聞きたくないという気持ちが起こってしまいます。私には一種の殺人のように思えるのです。いろいろな事情があるにせよもっと子供のことを考えてほしいし、生命が生まれる前にもっとなんとかしてほしかったと

いう気がします。でもこんなこと今の私が思っても現実にその立場にいる人からすれば、青くさい考え方「なんて思われるのかもしれません。でも私にはやっぱり許せない気がします。特にあの手術道具が何度見ても（写真ですが）目をそむけてしまいます。

心に深い傷をおって涙を流しながら手術を受けているとよく聞きます。あたりまえのことだと思えます。自分が考えるのはあたりまえですが、相手はもちろんまわりの人間がもつとよく考えてあげてほしいです。

短いですが、感想をのべさせていただけます。これから見せていただいたビデオ、いろいろといただいた資料中絶に私が大人になつて行く道で役に立つと思います。どうもありがとうございました。

岡本知佐

荒井良著 胎児の現境としての母体」¥480

すべての赤ちゃんが健康に生まれ、育つてほしい。そのためには幼い生命と母体の生野について確かな知識をもたねばならない。著者は、「子供の医学協会」での豊富な体験から、赤ちゃんの健康は生後の配慮だけでは守れず、妊娠に始まり胎児から出産へと進む過程のすべてに深く関係していることをやさしく説き明かす。

菊田昇「私には殺せない」¥600

実子が養子か、この一字のちがいで、きょうもまた何十人あるいは何百人かの赤ちゃんの生命がヤミからヤミに葬られて行く。そして、それは「戸籍をよこす」という日本人の伝統的な意識と古い法律にもとづくものと、著者は鋭く指摘している。悪名高き

「墮胎天国ニッポン」のこれは秘められた恥部である。生命の尊厳を身体をはって主張する菊田医師の、切実な訴えに為政者よ、医師よそして娘を持つ親たちよ、耳を傾けられよ。

〔お願い〕

全国のみなさん。たくさん意見と考えが欲しいので記事か詩を送り下さい。心からお待ちしています。ノボトニー

（すみませんが原稿料はよう払いませぬ。）